ESSAY 134

車いすからのスタート

仲島正教

兵庫県西宮市で小学校教師を21年、指導主事を5年勤め、2005年に48歳で退職し、教育サポーターとして活動。現在、若手教師パワーアップセミナー「元気が一番」塾主宰、聖和短期大学非常勤講師。

「あっ、あの28番、勇三や！」

それは、この日（2月22日）京都で行われた「全国車いす駅伝大会」のTVニュースでした。たった10秒ほどの映像ですが、優勝した京都チームの後、次々にゴールする中に兵庫県のアンカーを務めた勇三も映っていたのです。すぐ、勇三に電話をかけます。

「勇三、いまテレビ見たか？　映ってたぞ」

＊

大沢勇三（仮名）現在27歳。

勇三との出会いは、彼が小学校4年生の時です。私の隣のクラスに転入生としてやってきました。家庭状況は厳しく学力的にもしんどい子どもでしたので、担任外の私も一緒によく関わっていました。算数プリントをしている勇三のそばに行くと、

「邪魔や、向こうに行ってくれ！」

と私を拒絶します。そばから離れると、プリントの問題に向かって、

「くそー、ボケー」

と当たり散らすのです。出来ない自分に腹を立てイライラしているのです。その後も自分に自信が持てず自暴自棄な生活を繰り返す勇三でした。

そんな彼を大きな事故が襲います。定時制高校に進学後、昼間の仕事中にビルの8階から転落したのです。奇跡的に命は取り留めましたが、以後彼は車いす生活になったのです。

勇三はさらに自暴自棄になり自殺も考えるのですが、母親と兄の献身的な介護に次第に心を開いていきました。2年間の闘病とリハビリの後、高校にも復帰します。福祉センターで見た60歳を超えたおじいちゃんの車いすバスケットに感動し、自分も車いすバスケットに挑戦します。

その頃、私に一本の電話がかかってきます。

「先生、俺、勉強を教えてほしい」

以後、週1回必ず私の職場に寄って二人だけの勉強会です。それは小学校3年生の分数の計算から始まりました。

「先生、分数の掛け算って簡単やな」

「そうや、足し算より簡単やろ」

私が宿題を出すと必ずやってきます。

「先生、わかるっておもしろいな」

こんな気持ちを小学校の時、彼に味わわせてやれていなかったのです。彼と私の勉強会は半年間続きました。分数から始まった勉強は因数分解もできるところまで達していました。そして彼は高校を6年かけて無事卒業したのです。卒業式に車いすで堂々と出席する彼は本当に「いい顔」をしていました。

高校卒業後、勇三は車いすアスリートとして本格的に取り組み始めます。兵庫県内の大会で次々と記録を出し、23歳の時には岡山国体（障害者）の県代表に選ばれ、選手の結団式では知事の前で挨拶もすることになりました。

「先生、俺、挨拶なんかできないよ。教室でも発表したことないのに……」

「大丈夫や、いまの勇三なら大丈夫や」

勇三は、知事の前で見事に大役を果たし、岡山国体ではスラローム競技において大会新記録で見事優勝するのです。応援に行った私の元へ金メダルを持ってきてくれました。

すると、地元の公民館や小学校から、彼に講演依頼が次々にきます。

「先生、俺にはそんな講演は無理や」

「大丈夫や、勇三やったらできる」

地元の公民館での彼の講演を聴きながら私は涙がとまりませんでした。小学生の時、算数の問題に向かって「くそー、ボケー」と当たっていた勇三が、いまたくさんの人の前でこんなにも堂々と自分の生い立ちや生活を話しているのです。母親や兄の話では涙ぐみ、自分の周りの人への感謝を語る勇三の姿は本当に大きくかっこよく見えました。

「先生、俺はあの事故から生まれ変わったんや。死のうと思ったけどやっぱり生きるのは最高や。俺の人生は車いすからもう一度スタートしたんや」

そんな勇三が真顔で私にこう約束してくれました。

「先生をいつかパラリンピックに連れていってやるからな」

＊

みなさん初めまして。挨拶が最後になりましたが、今月からこの頁を書かせていただく仲島と申します。前任の山田ゆかり先生があまりにも偉大だったので、大きなプレッシャーを感じていますが、一生懸命にがんばりたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。

体育科教育　五月号

二〇〇九年五月一日発行

編集者　「体育科教育」編集部
発行者　鈴木一行
印刷者　横山明弘
発行所　大修館書店
〒一〇一―八四六六　東京都千代田区神田錦町三ノ二四
電話　編集部〇三（三二九四）二三五八　販売部〇三（三二九五）六二三一
FAX　編集部〇三（三二九五）四七七四　販売部〇三（三二九五）四一〇八
印刷・横山印刷株式会社

ESSAY 136

指導の半分は待つこと

仲島正教

兵庫県西宮市で小学校教師を21年、指導主事を5年勤め、2005年に48歳で退職し、教育サポーターとして活動。現在、若手教師パワーアップセミナー「元気が一番」塾主宰、聖和短期大学非常勤講師。

いまから27年前、私がまだ25歳の青年教師の頃、土谷正規先生（元奈良女子大附属小副校長）と運命的な出会いをします。

土谷先生は私にこう言いました。

「子どもの躍動を望むなら『教えない』ことです。教師が指示、教示をして子どもが『出来た』と喜んでいる姿は、躍動ではありません。

指導の半分は我慢して待つことです。あとの半分は子どもの中に飛び込むのです」

※

私は、いわゆる「教え魔」先生でした。自分の知っている知識や技術を子どもたちにいっぱい教えてやれることが楽しかったし、それが教師の役目だと思っていました。

中学・高校・大学と10年間バスケットボールをしてきた私は、5年生のバスケットの授業を前に燃えていました。そんな私に土谷先生は釘をさします。

「仲島先生、教えたらダメだよ。まあ、だまされたと思って我慢して待ってごらんなさい」

こうして私は「教えないバスケット」の授業づくりに挑戦していきます。第1時間目、さっそく試合をしますが、

「ルールはなし。さあ、始めますよ」

そんな勝手な指示でボールを渡し、試合がスタートです。でも混乱は起きません。子どもたちは今まで教わってきたルールで無難に試合を進めていました。が、突然大騒ぎになったのです。運動の苦手なAさんが、反対側のゴールにシュートをしたのです。

「どこにシュートしているんや！」

とまわりから非難されると、

「だってルールはないんでしょ」

と反論します。

「先生、Aさんが勝手なことを……」

と私に訴えますが、私は、

「Aさんの言う通りだよ。ルールは決まっていないよ」

その後はもう大混乱です。となりのコートに入り込むやら、好きなゴールにシュートするやら、収拾がつきません。

「先生、なんとかしてください」

「それは自分たちで考えるんだよ」

と突き放します。

こんな混乱のスタートをきった授業でしたが、我慢して待っていると驚くことが起き始めます。子どもたちは自分たちで学級会を開き、ルールの検討を始めます。練習方法も自分たちで考え始めます。もちろん変なルールや効果のない練習もありました。その時、私がしていたのは、子どものそばに行き、いま何に悩み、何を考え、何をしたいのか、いろいろ聞いていただけです。そして活動内容を記録し、子どもに返していきます。そしてまた一緒に考えていくのです。

そんな授業でしたが、徐々にチームはまとまり、技術指導もしていないのに技術が伸びていくのです。本当に不思議な現象を目の当たりにし、私は「教える」って何だろうか、「教師」って何だろうかと改めて考え直したのでした。

いま、ゆとり教育が非難され、全国学力テスト等で学力向上が叫ばれ、全国順位に一喜一憂し、早く結果を出そうと必死になる多くの自治体。そんな流れに子どもたちは翻弄されています。もちろん、学力向上は大事ですし、それを定着させるのも我々教師の役目でしょう。でも何か大切なことを忘れていると思えてしかたがありません。

※

いまからちょうど5年前の2004年7月に一人の高校教師が60歳でこの世を去りました。その教師の名前は高畠導宏。約30年にわたりプロ野球の打撃コーチを務め、落合博満、イチロー、小久保裕紀をはじめ、数多くの名選手を育てた後、59歳で高校教師に転身し、甲子園を目指した異色のコーチであり教師でした。その高畠導宏先生の言葉です。

「コーチの仕事は『教えないこと』です。大きな耳、小さな口、優しい目で待つんですわ」

体育科教育　七月号

二〇〇九年七月一日発行

編集者　「体育科教育」編集部
発行者　鈴木一行
印刷者　横山明弘
発行所　大修館書店
〒一〇一―八四六六　東京都千代田区神田錦町三ノ二四
電話　編集部〇三（三二九四）二三五八
販売部〇三（三二九五）六二三一
FAX　編集部〇三（三二九五）四七七四
販売部〇三（三二九五）四一〇八
印刷・横山印刷株式会社

ESSAY 138

しっぱいに かんぱい！

仲島正教
兵庫県西宮市で小学校教師を21年、指導主事を5年勤め、2005年に48歳で退職し、教育サポーターとして活動。現在、若手教師パワーアップセミナー「元気が一番」塾主宰、聖和短期大学非常勤講師。

市大会、県大会、全国大会と今年の夏も多くの中学生や高校生が「最後の夏」に燃えたことでしょう。でも優勝は1チームであり1個人であって、あとのチームや個人は涙をのんで終了というのが現実です。自分のミスで試合が終わってしまった、あの時あの失敗をしなければ勝っていたのに……そんな悔いも残ったかもしれません。そういうチームや個人に読んでほしい本があります。

☆　☆

『しっぱいに　かんぱい！』（宮川ひろ・作、小泉るみ子・絵　童心社）

今年度の青少年読書感想文全国コンクールの小学校低学年の部の課題図書です。15分もあれば読み切れる小学校1年2年向きの本です。

1年生からずっとリレーの選手に選ばれてきた加奈は、6年生の最後の運動会のアンカーを任されます。3位でバトンを受け取った加奈は2人を抜いて1位でゴールイン。でも結果は加奈のオーバーゾーンで失格。加奈は落ち込み、ご飯も食べることができません。翌日、おじいちゃんが親戚を呼んでみんなで昼ごはんを食べます。そこで一人ひとりが自分の失敗話をしていきます。するとおじいちゃんは言います。

「洋のしっぱいにかんぱいだ！」

次はまなみの話です。

「まなみのしっぱいにかんぱいだ！」

次々にビールとジュースの乾杯が続いていきます。みんな大笑いです。すると加奈にも笑顔が戻りました。

☆　☆

今から25年前、私が初めて6年生を担任した時の運動会のことです。

和夫のリレーチームは、練習では負けてばかりでした。あまりに負け続けるので「チームを変えようか」と提案すると和夫は拒否します。

「このまま自分たちで頑張るから……」

和夫はチームメートに「朝練をしよう」と声をかけますが、数人の子は朝練をさぼるので、和夫は毎朝その子の家に寄り、一緒に連れ出します。女子で足の遅い子には、横についてフォームを教えます。バトンパスのタイミングを計るために大きな声を出して励ます。そんな練習が10日ほど続き、運動会本番を迎えました。

すると信じられない光景が私の目の前で起こりました。いつもビリだった和夫のチームがなんと1位を独走です。追い詰められてもバトンパスでまた引き離します。そしてとうとうアンカーの和夫にバトンが渡りました。感動のゴールが待っていると思った瞬間、和夫の手からバトンが落ちたのです。追い詰めてきた隣のクラスのアンカーとの接触です。あわててバトンを拾うのですが、和夫の前にはすでに3人のアンカーが通り過ぎていきました。和夫は4位でゴールイン。

「みんなごめんよ……ごめんよ……」

和夫は肩を震わしながら泣いています。すると、チームの仲間8人が駆け寄り、

「和夫、泣くな。これで十分や。和夫のおかげなんや、和夫ありがとう！」

と一緒に泣いていました。

☆　☆

加奈のおじいちゃんは言うでしょう。

「和夫のしっぱいにかんぱいだ！」

そして、おじいちゃんは続けてこう言いました。

「しっぱいするのも、たいせつなこと。だいじょうぶ、だいじょうぶ」

●編集室から

今月は「戦術学習」をキーワードに取り上げて誌面上のシンポジウムを催しました。実践モデルをめぐって様々な立場の方々に論じ合っていただきましたが、いかがでしたでしょうか。

実践モデルはゴール型に限定しましたが、本号だけですべてのゲームを扱いきれるというわけでは勿論ありません。また「局面学習」という新しい考え方も生まれてきています。

モデルの是非や軽重の判断は読者諸氏にゆだねたいと思います。みなさまのご意見・ご感想を歓迎します。

ご登場いただいた先生方には、短期間のあいだに提案・意見・コメントの原稿を書いていただくという、かなり強引なお願いを差し上げてしまいました。学期末のご多忙を極める時期にもかかわらず快くお引き受け下さり、誠にありがとうございました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

体育科教育　九月号
二〇〇九年九月一日発行
編集者　「体育科教育」編集部
発行者　鈴木一行
印刷者　横山明弘
発行所　大修館書店
〒一〇一―八四六六　東京都千代田区神田錦町三ノ二四
電話　編集部〇三（三二九四）二三五八
販売部〇三（三二九五）六二三一
FAX　編集部〇三（三二九五）四七七四
販売部〇三（三二九五）四一〇八
印刷・横山印刷株式会社

ESSAY 140

民主党政権に望むこと

仲島正教

兵庫県西宮市で小学校教師を21年、指導主事を5年勤め、2005年に48歳で退職し、教育サポーターとして活動。現在、若手教師パワーアップセミナー「元気が一番」塾主宰、聖和短期大学非常勤講師。

教員免許更新制度が本格的に始まったこの夏、政権交代が起こりました。免許更新制度の維持充実を進めようとした自民党が敗れ、見直しを考える民主党が政権についたのですから、現場の教師は今後どうなるか、期待と不安でいっぱいのことでしょう。民主党は制度を廃止するかわりに、大学での教員養成を4年から大学院を含めた6年にしようと考えています。

教育界で問題が起こると必ず教員の資質向上が課題にされます。「教育の最大の環境は教師」ということを考えれば、教員の資質向上は至上命令であることがよく理解できます。ただ、二十数年現場で働いてきた私から言わせれば、一度に30時間の講習を受けたところで、また大学院を出たからといって、大きな効果があるとは思えないのです。事実、免許更新制度の評判はあまりよくなく、講習を受ける側からも、する側からも不満が続出していると聞きます。また私がこれまで出会ってきた多くの教師の中で、大学学部卒と大学院卒の違いで、教師の資質の差を実感したことはありません。

研修は絶対に大事です。教師は新任から退職するまで常に研修し、資質向上に努めなければなりません。要は研修の仕方だと思います。免許更新制度には莫大な予算が必要ですが、それをもっと有効な研修に回すことができるはずです。大学4年と大学院2年を続けて6年にするより、現場を10年ほど経験した後に誰もが大学院に行けるようにすれば、もっと有効な研修になるはずです。そんな研修や大学院に気兼ねなく行けるように教員の増員を望みたいのです。現在行われている数多くの研修は教師を多忙にし、心身ともに疲弊させているだけなのです。そんな状態でいい教育は期待できません。

※

先日、ある学校の授業研究会に参加しました。授業者は新任2年目の教師。その先生は教材研究にも真面目に取り組み、授業展開も悪くはないのですが、どうも心に響きません。この2年間初任者研修を何十時間も受け、知識はあるのですが、なぜかうまくいかないのです。私は授業後訊ねます。

「すごく衝撃を受けた授業や感動した授業に出会ったことはありますか?」

「出会っていません」

「○○先生のことは知っていますか?△△小学校の研究会のことは知っていますか?」

私は全国的に名の知られた先生や有名な研究校の名前を出しました。

「知りません」

※

私は小学校の頃からずっと体育が得意で大学も体育科を卒業しました。だから体育の授業ぐらいうまくできると思っていましたが、現場に出てみるとそうはいきませんでした。得意なはずの体育で壁にぶち当たったのです。そんな時同僚の先生が、あの先生の授業を見に行ってごらん、あの学校の授業は参考になるよと教えてくれたのです。

全国からたくさんの参観者がやってくる静岡の横内小学校や千葉の津田沼小学校の体育を目の当たりにして衝撃を受けました。筑波大学附属小の林恒明先生に感動します。そして最も衝撃を受け、その後の私に大きな影響を与えたのは、奈良女子大学附属小の岩井邦夫先生の「忍者体育」でした。当時26歳の私のノートにはこう書いてあります。

「こんな授業は見たことがない。こんなに生き生きと動く子どもは見たことがない。こんなに教えない先生は見たことがない」

続いて、岩井先生の話のメモです。

「子どもは自ら学ぶ力を持っているのです。学習というものは教師が力ずくで教授するものではありません。教師の役目は、子ども自ら進んで学習に取り組み、学習の仕方を工夫し、学習する力を身につけ、自分の力で自分の道を力強く歩んでいくことができるようにすることなのです」

以後、私の授業は大きく変わりました。『本物の授業』と出会うこと――これこそが教師の資質向上につながると思うのです。そんな研修ができやすい教育環境をつくることを民主党政権に私は望みたいのです。

体育科教育　十一月号

二〇〇九年十一月一日発行

編集者　「体育科教育」編集部
発行者　鈴木一行
印刷者　横山明弘
発行所　大修館書店
〒一〇一―八四六六　東京都千代田区神田錦町三ノ二四
電話　編集部〇三（三二九四）二三五八　販売部〇三（三二九五）六二三一
FAX　編集部〇三（三二九五）四七七四　販売部〇三（三二九五）四一〇八
印刷・横山印刷株式会社

ESSAY 142

心のビデオ

仲島正教
兵庫県西宮市で小学校教師を21年、指導主事を5年勤め、2005年に48歳で退職し、教育サポーターとして活動。現在、若手教師パワーアップセミナー「元気が一番」塾主宰、聖和短期大学非常勤講師。

今から8年ほど前、飛行機の中でたまたま映画を観ました。あまりはっきり覚えていませんが、こんなストーリーでした。人間が亡くなったあと、あの世に行く前に1週間ほど学校のような施設に入ります。そこでこう言われます。

「今日から3日間のうちに、自分の人生でもう一度見てみたいシーンを選んでください。次の3日間でこちらがそのビデオを製作します。そして最後の日にその思い出の映像を見てからあの世に行ってもらいます」

そう言われた人たちは、どんな映像を最後に見たいか考えます。ある人は妻との思い出をもう一度見たいと言い、ある人は妻には申し訳ないけど初恋の人との出会いがいいと言います。なかには、自分の人生は嫌なことばかりだったから思い出したくないという人も現れます。そんな人間模様を描いた映画でした。

この映画を観た人は、みんな考えます。もし自分だったら何を映像にしてもらおうかと……。私も考えました。

☆　☆

私は学生の頃からスキーが大好きで、暇さえあればスキーに行っていました。就職してからも、そして結婚してからも冬休みは必ずスキー場という生活でした。子どもが生まれてからは、小さな我が子を抱いて滑るのも喜びの一つでした。早くこの子にスキーを教えて一緒に滑りたいという気持ちもあったのですが、それはしませんでした。ずっと雪遊びです。雪だるま作りやソリ遊びや雪合戦、とにかく雪と思う存分遊ばせていました。すると5歳になったある時、

「ワタシもあんな板で滑ってみたい」

と言ったのです。そしてスキー板を与えてやると嬉しそうに滑り始めました。こけてもすぐに起き上がります。滑るために斜面も自分で上ろうとします。一気に上達していきました。無理やり教えるのではなく、こういう環境を作ってやれば自然に上達するのがよくわかりました。

そして姉が小学5年生、弟が小学1年生になった冬に、ついに家族4人が一緒に滑れる日が来ました。八方尾根スキー場名木山ゲレンデの上から、先頭が私、次にお姉ちゃんが、そして弟、一番後ろはお母さんです。

「さあ、いくぞ」

「うん、いいよ」

私たち4人はゆっくりゆっくりと大きな弧を描いてゲレンデを滑り降りていきます。まるでカルガモ一家のようです。時々後ろをみると我が子ががんばって滑っています。「なんていい家族なんだ」って幸せな気持ちが湧いてきます。ゲレンデの下にいるみんなに「おーい、こっちを見て」と言いたくなるくらいでした。滑り降りた後、思わず姉と弟を抱きしめてしまいました。

☆　☆

親バカの私は、当時けっこう高価だったビデオカメラを購入し、子どもたちの成長を撮り続けていましたが、このシーンはもちろん撮れていません。自分も滑っていたのですから……。

でも、これまでビデオカメラで撮ったどのシーンよりも、このカルガモ一家の滑りのシーンが一番記憶に残っているのです。あのシーンを思い出すと今でも幸せな気持ちになってきます。

テープに録画されていなくても、私の心のビデオにしっかりと録画されているのです。心のビデオは機器がなくても、いつでも映写できるのです。

私の場合は、わざわざ思い出の映像を作ってもらわなくても、幸せな気持ちであの世に行けそうです。

●読者の声

拝啓　小島伊織先生

本誌12月号で「果たしてそこに子どもたちの楽しむ姿を重ねて想像できるか」と問うた小島先生の言葉に、ハッとさせられたのは私だけでしょうか。

9月号の誌上シンポジウムで提案された多様な学習方法に、振り回されすぎないよう注意する必要があります。小学校では学級経営を基盤とし、目前の子どもと向き合う中で課題を捉え、解決への学習方法が選択されるべきです。目新しさに過剰反応し、表層的な理解で満足することへの注意が必要です。子どもを課題にあわせるのではなく、子どもに課題をあわせることが大切です。教師にはスキルだけでなく、子どもを理解しようとする姿勢が必要です。ここから子どもの成長するイメージが浮かんでくるのです。

小島先生は私たちに、教師としての信念と責任を確かめる時だと訴えているのではないでしょうか。　敬具

尼崎市立教育総合センター　大平誠也　拝

体育科教育　一月号
二〇一〇年一月一日発行
編集者　「体育科教育」編集部
発行者　鈴木一行
印刷者　横山明弘
発行所　大修館書店
〒一〇一―八四六六
東京都千代田区神田錦町三ノ二四
電話　編集部〇三（三二九五）二三五八
販売部〇三（三二九五）六一三一
FAX　編集部〇三（三二九五）四七七四
販売部〇三（三二九五）四一〇八
印刷・横山印刷株式会社

ESSAY 144

少し大目に見てほしい

仲島正教

兵庫県西宮市で小学校教師を21年、指導主事を5年勤め、2005年に48歳で退職し、教育サポーターとして活動。現在、若手教師パワーアップセミナー「元気が一番」塾主宰、聖和短期大学非常勤講師。

年末に行われた全日本フィギュアスケート選手権で浅田真央選手が優勝し、バンクーバーへの切符を手にしました。今回浅田選手は崖っぷちに立たされていました。でも彼女をなんとしてもオリンピックに出場させてあげたい、そんな願いが日本中に漂っていた気がします。

そんななかでの試合に、私もドキドキしながらテレビ放送を待っていたのですが、パソコンを入れると「浅田真央オリンピック出場決定」の速報が飛び込んできました。「あーよかった。優勝したんや」って大喜びしましたが、その直後のテレビ放送の実況にはドキドキ感はなく、なにか物足りない気分でした。やっぱりスポーツ観戦は、ライブでこそ迫力も緊張感もあっておもしろいのです。

☆　☆

先日、22歳になった教え子の同窓会がありました。そのなかで教え子からこんな会話が飛び出してきました。

「センセイ、長野オリンピックのジャンプ団体戦を教室のテレビで見たこと、すごく心に残っています。原田の大ジャンプに、船木の金メダルジャンプに教室中大騒ぎ、みんな感動しましたね」

「俺も覚えてるわ。めちゃ興奮したわ」

「私も教室中走り回ったわ（笑）」

そんな教え子の声に私は、

「そうやなあ、あの時午前中ずっとテレビをつけていたもんな。でも先生としてはな、授業をつぶしてこんなにテレビを見ていたら、怒られるのじゃないかと気が気ではなかったんだぞ」

「でもセンセイ、あの時、選手の国の位置を地図帳で調べさせたり、気候や国旗を一応勉強させていたで（笑）」

「センセイは、原田が前の大会で失敗したことや、補欠選手がなにをしているかとか、裏方さんの役割とか、けっこう道徳的なことも話していたで」

「センセイ、あれは立派な授業や（笑）」

「ウン心に残るエエ授業やった（笑）」

あの長野五輪のジャンプ団体戦は、途中吹雪になり中断したのですが、いい場面だったのテレビを消すわけにもいかず、結局最後まで見せてしまったのです。午前中ずっとテレビを見ていたのですから、保護者からの苦情を私は覚悟しました。でも意外なことに苦情どころかこんな手紙をいただいたのです。

「テレビでスキーを見ていました。日本チームの頑張る姿に感動し涙が出ました。こんな様子を子どもたちにも見せたかったなと思っていると、午後子どもが帰ってきて『今日学校でジャンプ見たよ。すごく盛り上がっていたよ。感動したよ』と話してくれたのでびっくりしました。と同時にとってもうれしく思いました。子どもたちにテレビを見せてくださり、ありがとうございました」

正規の授業を割いてオリンピックを見せてしまった私を、このお母さんは大目にみてくれたのです。

長野五輪から12年、今のご時世では、こんなことをすると保護者だけでなく教育委員会からも処分を受けるかもしれません。長野のときとは違い学校は週5日になりましたし、とくに今年はインフルエンザによる学級閉鎖も被って授業時間の確保に必死ですから、とんでもないことでしょう。

でも私は思うのです。

今の学校は、あれもこれもしなさい、こうあるべきだ、これはいけない、といろいろ厳しくいわれ、元気がなくなっています。

そんな風潮に教育委員会も校長も先生もがんじがらめです。そして当たり障りのないように過ごそうとすることが、閉塞感を生み、希望がもてなくなるのです。少しぐらい枠からはみ出すことも許してくれるなら、学校はもっと生き生きするのではないかと思うのです。

☆　☆

私は46年前の東京オリンピックを、学校の図書室のテレビで見ました。100mのボブ・ヘイズの姿は、今も心に残っています。

さあ2月、バンクーバーオリンピックの開幕です。浅田真央選手のフィギュアフリー決勝は、日本時間25日午前10時からです。

体育科教育　三月号

二〇一〇年三月一日発行
編集者　「体育科教育」編集部
発行者　鈴木一行
印刷者　横山明弘
発行所　大修館書店
〒一〇一―八四六六　東京都千代田区神田錦町三ノ二四
電話　編集部〇三（三二九四）二三五八　販売部〇三（三二九五）六二三一
FAX　編集部〇三（三二九五）四七七四　販売部〇三（三二九五）四一〇八
印刷・横山印刷株式会社